

死者の日 (14.11.2)

「一人も失わないで、終わりの日に復活させる」

死者の日の由来

初代教会の時代から、教会は死者のためにミサをささげて来ました。ですから、二世紀ごろに書かれた殉教記録にも、死者のために追悼ミサをささげたという記録があります。

けれども、典礼において11月2日をすべての死者の記念日と定めたのは、フランスのクリュニー修道院長オディロンが、998年、死者のための記念祭を、管轄するすべての修道院で行うよう決めたことがその始まりであります。ですから、11月2日の死者の日は、当時の西欧諸国に早速広まり、15世紀には、特にスペインのドミニコ会修道院で盛んに行われたということです。しかも、その日には、司祭はミサを三回ささげることが出来るようになったのです。

したがって、このミサを三回ささげる特権は、18世紀になると、スペイン、ポルトガル、さらに中南米にまで広がったそうです。その結果、1915年には教皇ベネディクト十五世は、この特権を全教会に与えました。

そこで、この死者の日のためのミサの典礼において三つの式文が作成されました。その内容は、いずれもキリストにおいて眠りについたすべての人々の救いの完成を、イエス・キリストの復活に基礎づけております。

ですから、このように中世以来、11月を「死者の月」とする伝統が始ったのであります。

死者の叙唱

では、早速、今日のミサで使われる「復活の希望」を祈る死者の叙唱のさわりの部分を確認したいと思います。

「キリストのうちにわたしたちの復活の希望は輝き、死を悲しむ者も、とこしえのいのちの約束によって慰められます。

信じる者にとって、死は滅びではなく、新たないのちへの門であり、地上の生活を終わった後も、天に永遠のすみかが備えられています。」

以前、四十代の半ばの働き盛りの建築士が亡くなられて、その追悼ミサには東京から上司や同僚の方々が参加しました。ミサの後、故人を偲んでの会食の席上、会社の会長さんが、わたくしにご自分の率直な感想を話されました。

「せめて今日一日だけでも、復活を信じたいです。」と。

信者でない方にも、死者のためのミサでひととき魅力的に響くのは、復活信仰にほかなりません。

終わりの日に復活させる

そのために、イエスは、今日の福音で、まさに重大な宣言をなさいました。

「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心とは、子を見て信じる者が皆永遠のいのちを得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

実は、イエスご自身からこのような^{まこと}真に希望に満ちたありがたいおことばをいただくために、わたしたちは長い年月をかけて待たなければならなかったのです。ですから、今日の第一朗読にあるように、

「神に従う人の魂は、神の手で守られ、もはやいかなる責め苦も受けることがない。・・・

人間の目には懲らしめを受けたように見えても、
不滅（不死）への大いなる希望が彼らにはある。」

と紀元前一世紀ごろに至っても、まさに控えめな希望しか知らされなかったのです。

ちなみにこの『知恵の書』とほとんど同時代に書かれたとされる『マカバイ記二』には、まさに復活信仰の素晴らしい芽生えと思われる壮絶なエピソードが伝えられています。七人兄弟の殉教物語です。

「息を引き取る前際に、彼は言った。『邪悪な者よ、あなたはこの世から我々の命を消し去ろうとしているが、世界の王は、律法のために死ぬ我々を、永遠の新しいいのちへとよみがえらせて下さるのだ。』・・・

やがて彼も息を引き取ると、彼らは四番目の者も同様に苦しめ、拷問にかけた。死ぬ間際に彼は言った。『たとえ人の手で、死に渡されようとも、神が再び立ち上がらせてくださるという希望をこそ選ぶべきである。・・・』

（このように、目の前で七人の息子が惨殺されるのは目の当たりにした母親は最後に復活信仰に至る見事は信仰告白をしました。）

「わたしはお前たちに霊と命を恵んだのでもなく、わたしがお前たち一人ひとりの体を組み合せたのでもない。人の出生^{しゅっしょう}をつかさどり、あらゆるものに生命を与える世界の造り主は、憐れみをもって、霊と命を再びお前たちに与えてくださる。」（マカバイ二、7.9-23）

わたしがいのちのパンである

ここで、もう一度、今日の福音の文脈に戻って見ましょう。つまり、今日の福音の朗読箇所は、ヨハネ福音の6章からとられているのですが、その章は、パンの奇跡を行った翌日に、弟子たちと群衆に向かってご自分こそ天から降って来たいいのちのパンであることを、切々と語られたときのおことばであります。

「わたしはいのちのパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる決して渴くことがない。しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。」（ヨハネ 6.35-36）

そして、今日の箇所に続くのです。したがって、キリストの体である御聖体は、まさに復活のいのちの糧にほかなりません。ですから、教会は、死を迎えようとしている病人に聖体を授けるよう努めるのであります。

また、死者のためのミサでは、次のように祈ります。

「洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、その復活にも結ばれますように。キリストは死者を復活させるとき、わたしたちのみじめなからだを、主の栄光のからだを同じ姿にしてくださいます。

また、亡くなったわたしたちの兄弟、み旨に従って生活し、いまはこの世を去ったすべての人をあなたの国に受け入れてください。

わたしたちもいつかその国で、いつまでもともにあなたの栄光にあずかり、喜びに満たされますように。そのときあなたは、わたしたちの目から涙をすべてぬぐいさり、わたしたちは神であるあなたをありのまま見て、永遠にあなたに似るものとなり、終わりなくあなたをほめたたえることができるのです。」